

六本指の猿

場理瑠都

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本をかつて支配した、六本の指を持つ猿の物語

目次

第1話

—

1

第2話

—

7

第1話

その部屋の中では、咳の音だけが、聞こえていた。

部屋の中央に置かれたベッドの上に横たわる、一人の老人が断続的に繰り返す咳の音だけが、室内に聞こえていた。

豪華なベッドだった。

今のこの国で、このような豪華なベッドに眠ることが出来るのは、おそらく今そこに横たわる老人一人だけであろう。

ベッドに横たわる老いた男は、醜かった。

どんな人間であつても、一目見た次の瞬間には思わず目をそらしたくなるような醜さによつて、その男の外見はできていた。

今まさに、病によつて消えようとするその男の命が、まさにそのことによつて命の本質を晒しているがゆえに、醜いのかもしれない。

命とは、本質的に、醜い。

人は文明という装飾や性欲という色眼鏡によつて、それを胡麻化す。そうしなければ、生きていくことから逃げ出したくなってしまうから。

しわにまみれ、しなびた肌と、骨と皮ばかりに細くなった体を、咳をするたびに震わせ、それでもなお生き続けたいという執念を放ちながら、醜く老いた男は寝台に横たわりながら、何かを待望していた。

「殿下」

声が出た。

部屋を開けて、入ってきた、横たわる男とは別の人間の声だった。

老いた男は、ぎろりと、ベッドの上から、彼に比べればずっと若いその男をにらみ、問う。

「来たのか？」

「はい。徳川内府様が、いらつしやいました」

うやうやしく、頭を下げて、淡々と、若い男は答えた。

老いた男の顔は、それまで、苦痛に満ちていた。

その顔が、部下から一人の男の来訪を告げられたとたん、ぱ、と明るく、歓喜に満ちたものに変わった。

「すぐにここにへ通せ。治部」

「はっ」

治部と呼ばれた男は、一礼すると、部屋から出て行った。代わりに、治部よりは年を

取った男が、部屋に入ってきた。

肥った男だった。

その巨体からは、見るものを畏怖させる雰囲気、発せられていた。命すらあやふやな時と場所を幾たびも乗り越えてきた人間だけが、その雰囲気を放つことが出来る。

その男は、知性を感じさせるその顔を苦惱で満たしながら、ベッドの前で床に跪いた。ベッドの上で、上半身を起こした老いた男は、それをじ、と見下ろし、思った。

きつとこいつは、この体の中に、世界の総てを飲み込めるだろう。今の俺には、もうできないことだ。

形式的な挨拶を、二人は交わした。その後で、ベッドの上の男は言った。

「この世から去る前に、お前の顔を見たくなったのだ。内府よ」

「何をおっしゃいますか。太閤殿下」

内府と呼ばれた、床に座る男は、太閤殿下と呼んだ、ベッドに横たわる男をじつと、見た。

「殿下ほどのお方が、病などとの戦にて命を落とすなど、決してございません」

「しやあしやあと世辞を口にするな。内心では、俺が死に近づいているのを喜んでいるのであろうか？」

内府は、驚いた挙動をした。

「滅相もない……。一体誰が、そのような戯言を申したのですか！ この内府徳川家康、殿下への忠誠心はこの国で最も強い男でございます。そのような讒言で殿下のお耳を汚したものだ、私が首をはねてやりましょう！」

太閤は、笑い出した。

この死に瀕した体で、まだここまで笑うことが出来るかと、家康は内心で驚いた。

「本当に、お前は狸だなあ！ 流石、御屋形様に己の妻子を殺せと命じられても、顔色一つ変えずに従った男よ！ 本心を隠蔽することにかけては、この国でお前になう者はいないであろうよ！」

太閤は、再び、激しきせき込み始めた。家康は立ち上がって、彼の背中をさすってやった。太閤の咳は、ほどなくおさまった。

太閤は、家康の手をつかんだ。

「お前の手は、大きいな。家康」

「……」

家康の手は、大きく、ごつごつしていて、ささくれだっていた。苦勞の跡が、目に見えてわかる手だった。

「お前はその手で、俺が亡くなった後、この国の総てをつかむだろう。これほどの強き手なら、こぼれ落とすモノなどないくらいに、全てをつかめるだろうな。さきほど出て

行つた石田治部三成の、筆と紙しか持たぬような清くて弱弱しい手では、決してつかめぬ。父である俺と違って何一つ不自由のない生まれ方をした秀頼には、このような手を持つことは、決して叶わぬだろう。二人ははずれ、お前の強い手で握りつぶされるだろうな」

ここ数日、決して見せなかつたくらい活力にあふれた様子で、太閤は語つた。その姿は、かつてこの老人が戦場をかけていた頃のようだった。今、家康と話すことが出来るのが、彼にはたまらく嬉しかった。それが、活力の源であつた。

「なあ家康、俺はお前に言つたことがあるかな？　俺が、人を見るときは、必ず手を見ることで、その者がどんな人間かを理解してきたことを」

「いいえ」

家康は、首を振つた。

「初めて聞いたお話でございます」

「ははは、そうか。そうだよ。俺は、子どもの頃からそうだったのだ。きつと俺の手が、人と違つていたから、俺は子どもの頃から、他人の手を見る癖がついたのだらうな。俺の手は、化け物の手だ。この国は、俺という化け物の、6本の指を持つ手に、一度握られたのだ！」

家康は、無言で、太閤の手を見つめた。

普通の人間の手には、指は五本しかない。
だが今、家康の前にいる太閤豊臣秀吉という男の右の手には、親指が二本あった。

第2話

「納得できません！ 勝者が敗軍の將に母親を差し出すなど、これまでの歴史で一度も聞いたことがありません！ どうか、お考え直し下さい殿下！」

蜂須賀正勝の激しい言葉が、室内を満たした。

秀吉は、うんざりした顔で、声の主を見て、ついで、他の家臣たちを見渡した。皆、黙つて、主君である秀吉と、古参の家臣である正勝を、不安そうな目で見つめていた。普段の会議においては常に巧みに弁舌を振るう石田三成でさえ、沈黙を守っていた。

秀吉は、ため息をついた。やれやれ、みんなそんなに正勝が怖いか。まあ無理もない、年老いたとはいえ未だに迫力のある外見は健在で、少しでも口答えすれば太い腕で体をねじ切られそうだからな。この古強者と話せるのは、俺だけだろうな。

「俺は、勝者なんかじゃねえよ」

その事実を口にすることが、秀吉は忌々しかった。

「小牧長久手の戦いで、俺はあの狸おやじに負けた」

糞！ 内心で秀吉は毒づいた。これというのも、あの間抜けな甥の秀次のせいだ！

俺があいつに、兵を預けなどしなければ……。

「家康があの後兵を退いたのは、俺があいつの旗印であつた織田信雄を脅して、降伏させたからにすぎん。あいつの持つあの精強な軍事力は、未だに健在なんだよ。鉄の結束を誇る三河武士共に加え、あいつは本能寺で信長様が亡くなつてから、甲斐の武田に仕えていた連中まで配下に加えやがった。その上、今のあいつは関東の北条や奥州の伊達と同盟の画策までしてゐるって話だ。東国の大勢力が結託して俺と敵対するようになる前に、あいつを懐柔しなきゃならねえんだよ。俺に従わせなきゃならねえんだよ。俺は妹まであいつに差し出した。けどどあいつは上洛してこねえ。だったら今度は母親でも差し出す他ねえだろうが」

「……その妹である朝日様は、既に人の妻でございました。殿下は無理やり離縁させ、家康に嫁がせた」

「仕方なかつたんだよ。俺には子どもがないから、親兄弟しか人質に仕える手駒がないんだよ」

「てめえこの猿！ あんまり調子にのつてんじゃねえぞ！」

正勝の怒号が、部屋を震わせた。

秀吉を含む、その場にいた全ての者が、その突然の怒声に、震えあがった。

「てめえの妹とおつかさんを手駒だあ!! てめえ、関白様だ天下人さまだと周りから持ち上げられているうちに、人の心を忘れちまつて、本当の猿になつちまつたのかあ!!」

ああん!？」

正勝は立ち上がり、腰を抜かした秀吉にずかずかと歩み寄り、その顔を引っぱたいた。
「蜂須賀殿おー！」

石田三成が、立ち上がった。顔が青ざめている。

「いくら貴方とはいえ、今の殿への振舞いは無礼!」

「黙れ小僧!」

正勝は、三成を睨みつけ、怒鳴り返した。

「俺はてめえと違ってなあ、こいつが信長様の下で足軽やってた頃から知ってたんだよ! 猿だか人だかわかんねえような汚ねえなりしてた時から知ってたんだよ! けどなあ、あの頃のこいつは家族を大事にする優しい男だったぜ。ちよつと前まで殺し合いをしていたような相手に、妹さんやおつかさんを人質として差し出すような、冷たい心を持つている奴じゃなかったぜ! 俺がこいつを一発しめて、あの頃にもどしてやらあ!」

蜂須賀正勝は、秀吉の頭上で、拳を振り上げた。

「やめてくれきやーも! 蜂須賀殿!」

その時、女の声が、室内を、走った。

襖を開き、入ってきた老女が、発した声だった。老女でありながら、大きく、力強く、

それでいながら、蜂須賀正勝の怒号とも違った、人の耳に不思議な響きを与える声だった。

その姿を見て、立ち上がっていた石田三成は再び座り、彼女に対して頭を下げた。他の家臣たちも、彼と同じように、頭を下げた。

蜂須賀正勝は、立ったまま、茫然として、彼女を見つめ、つぶやいた。

「なか様……。大政所さま……」

秀吉も、呟いた。

「おつかあ……」

秀吉の生母にして、今は大政所と呼ばれ、この大阪城に住む女性、なか。

まさに今、秀吉とその家臣たちが開く会議の議題となつている人物が、部屋に、入ってきたというわけだ。

本来、女性がこのような場に乱入するなど、あつてはならないはずのことである。しかし、この場にいるものの誰一人として、彼女を排除しようなどと、考えることすらできなかつた。

「蜂須賀殿の、おれを心配してくれる気持は、涙が出るほど嬉しいけどよう……」

ゆつくりとした足取りで、なかは、正勝と秀吉に歩み寄つていった。

「徳川様の所におれをいかせてほしいってその子に頼んだのは、おれなんだきやあも。」

あさひを慰めるためにいかせてほしうって、おれが頼んだんだぎやあ。あさひは昔から泣き虫のさみしがりやでよう。婿殿と別れてたつた一人で徳川様のところへ嫁へやられて、きつと今頃心細くてさみしくて、毎日泣いてるんだと思うんよ。あの子のところにおつかあがいつて、笑わせてやりたいんよ。だからよう、おれにいかせてくれきやーも。この老い先短い婆には、もう子どものためにしてあげられることなんて、これくらいしかないんだぎやあ。だからよう、秀吉のことを、どうか責めないでくれちよーよ」

なかは、跪いて、深々と頭を下げた。

蜂須賀正勝の、怒りに赤くなっていた顔が、緩んでいった。

なかの傍らに、腰を下ろし、「お顔をお上げください、大政所様……」と、丁寧に、声をかけた。

「大政所様の、お心も知らずに、無礼を働いたこと、誠に申し訳ございませんでした……」
ああ、同じだ。秀吉は、思った。あの時と同じだ。あの時と同じように、おつかあはおれを助けてくれた。

秀吉は、母を見つめながら、昔のことを、思い出していた。

彼が、決して一生忘れることが出来ないであろう、情景を、思い出していた。

男が一人、倒れていた。

血に、まみれながら、倒れていた。

それをみつめて、少年時代の秀吉は、立っていた。その頃はまだ、「日吉（ひよし）」という名前で、他の人間から、呼ばれていたが。

少年の手には、小刀が、握られていた。

小刀は、血を滴らせていた。

日吉は、汗を、体から、滴らせていた。目の前の情景を、自分が激情に駆られてしてしまつた行動の結果を、頭が理解することを、拒んでいた。

おれはいまなにをしたんだ？

なんでおれのおつとうであるこのおとこはたおれているんだ？

心中に浮かぶ疑問に、答える者はいない。そして心の奥底では、その問いの答えに日吉は気づいていた。気づいていたけれど、それを理解することを、本能が拒んでいた。

日吉の母である、なかが、立っていた。小刀を持って立つ息子と、倒れた夫を見つめながら、茫然として、立っていた。彼女の傍らにいる日吉の弟と妹たちも、沈黙を守つたまま、彼らを見つめていた。

「人殺し！」

沈黙は、家族でない者の声によって、破られた。

家の入口にいつの間にか姿を見せていた、近所の村人が、その光景を目にして、叫ん

だのだ。

彼は、踵を返して、駆け出した。

「日吉が竹阿見を殺したぞ！ 六本指の日吉が、親父を殺したぞ！」

叫び声が、外から聞こえた。

それを、ぼう、と聞く、日吉の肩を、なかが、つかんだ。

「逃げるみやあー！」

彼女は、叫んだ。

「逃げるみやあー！ 日吉ー！」

その叫びが、日吉を、ようやく我に返らせた。

少年は、駆け出した。

血に濡れた小刀をもって。

裸足で、大地を踏んで、外へと駆け出した。

少年は、サルと呼ばれるくらい、敏捷だった。大声を聞いて家から出てくる鈍重な村人たちを後ろに置き去りにして、彼はあつというまに村を抜け出して、わき目も降らず、一心不乱に、走り去っていった。

橋を渡り、道をかけ、ひたすら走る彼が足を止めたのは、もう日がくれたあとだった。息を激しく切らしながら、彼は徐々に走りを緩めてゆき、木の傍らに倒れこんだ。

周りを見渡せば、人の気配さえない、森の中だった。

人がいない代わりに、人を食う獣が出てきそうな、暗い森の中。

しかし、ここがどんなに恐ろしい場所だとしても、またあの村に戻るなど、彼には出来なかった。

人を殺した彼を、村人たちは決して許さないだろうから。

畜生。内心で、少年は毒づいた。

全て、この手のせいだっていうのか。

月の光の下で、日吉は、右手を見た。

親指が二本ある右手を見た。

指が六本ある化け物には、人並みの幸せなんか、得ることが許されないってことなのか？

日吉は、誰にでもなく、心中で、問うた。

化け物。

昼、日吉が、実の父の形見である小刀で刺し殺した養父は、いつも、彼を化け物と呼んで罵った。

彼だけではなく、村人の多くが、そうだった。

もの心つく頃から、彼は自分が他者と違うのだということを思い知らされていた。

彼が生まれた時、その右手の指が六本あるのを見た周りの連中は、母であるなかに、こんな子は殺してしまえと、言ったそうだ。

指が六本もあるなんて、気味が悪い。きつと前世で悪行をした報いで、こんな化け物に、生まれてしまったんだ。こんな子を生かしておいたら、きつとあんたの家にだって、ひどい災いが降りかかるに決まっている。そう、彼らは言った。

だが、なかは、首を振った。

殺しなんかしねえ。この子はきつと、おれたちみたいなどこにでもいる人間には出来ない、えれえ事をやるために、生まれてきた子なんだ。人と手の形が違っているのは、その証なんだ。おれは絶対、そう信じる。

そう、彼女は言ったと、聞いたことがある。村人たちがそう話すのを、日吉は盗み聞いたのだ。

まったくなかは変な女だよ、あんな汚い顔の猿が、そんな出来物になるわけにやあだろうに。

そういつて、彼らは笑った。

村人たちは、日吉を気味悪がり、しばしば迫害した。特に、彼と同年代の子どもたちが、彼を「六本指の化け猿」と呼んで、よく絡んできて、蹴ったり殴ったり石を投げたりしてきた。

とはいえ、そんなことをいうやつらを、日吉は殴り返したし、蹴り返したし、石を投げ返していたが。

日吉は、喧嘩が強かった。「猿」と彼があだ名されたのは、彼の容姿だけでなく、動きが敏捷だったことも理由の一つだったのだ。

スピードは、戦いにおいて有利を生む。日吉は自分を攻撃する連中を走って追いかけて殴り、時には木に登って上から石を投げ、相手が投げ返してきたら素早く降りて逃げたりした。

戦略は、効果を上げた。日吉が10歳になる頃には、彼に直接ちよつかいを出す悪ガキは村の中には大体いなくなっただけのものだ。

最も彼らはその代わり、彼の弟や、妹へと標的を映した。どちらも優しく気弱な性格だったので、しばしば一方的に虐めを受けたのだ。

だが、それも、長くは続かなかった。弟や妹を傷つける連中に対しても、日吉は攻撃を加えたからだ。

日吉は、弟と妹たちが、好きだった。彼らだけが、日吉を慕ってくれたからかもしれない。

弟と、妹と、母であるなかつた家族たちだけが、日吉という少年が好意をもって接することが出来る相手だったのだ。

弟たちの父親であり、なかの現在の夫である竹阿見という男は、しかし別だ。この義父を、日吉は憎悪し、竹阿見もまた、日吉を憎悪した。

てめえみてえな化け物が俺の息子だなんてな、反吐が出らあ。

竹阿見はよく、そういった。

悔しかったが、それでも、日吉は、彼に口答えすることを、我慢していた。母のいる前で、家庭にいさかいを起こしたくはなかったから、ずっと、我慢していたのだ。今日までは。

竹阿見はいつものように、日吉を罵った。そしてあろうことか、罵倒の矛先を、なかにも向けたのだ。

日吉みてえな化け物を生んだおめえにもなあ、反吐が出らあ！ 中古のお前を嫁にもらってやった挙句、こんなまで引き受けやがった俺が本当に哀れだぜ！ 指もまとも揃ってねえ出来損ないを生んだおめえも、女の出来損ないだつてのによ。

その言葉を聞いて、日吉は、激怒した。

自分への侮辱ならば、いくらでも耐えることが出来る。

しかし、なかへの侮辱には、耐えることが出来なかった。

気が付いたとき、日吉は、小刀を手に握っていた。それは、戦で死んだ彼の実の父親の形見だったものを、なかが彼に与えてくれたものだった。

我に返った時、日吉は、その小刀が、竹阿見の皮膚に深く刺さっていることに、気が付いた。

自分が、義父をこの手で刺したことに、気が付いた。

生まれて初めて、日吉は、人を殺した。

あまりにも、あつさり。

「は、はは」

今、月に照らされて木陰に座り込みながら、日吉は小さく笑った。

なんだ。みんな、人を殺しちやいけねえって言うから、人の命つてのはどれだけいたい
そんなもんだと思っていたが、こんなに簡単に奪えちまうものだったとはな。それとも
簡単に消えてしまうから、人の命つてのは大事にしなきゃいけないものだったってこと
かな。

俺の命も、きつと、もうすぐ簡単にあつさり、消えてしまいうだろう。父親を殺した
やつを、お天道様が許すわけがない。元から俺は、きつと神様やら仏様から、嫌われて
いたんだ。だから、こんな指をもって、生まれさせられたんだろう。父親を殺してみじ
めに死ぬことは、生まれた時から俺にとって決まっていたことだったのさ。

おつかあは、馬鹿だ。日吉は、思った。

俺の指は、「えれえ事をやる人間である証」なんかじゃなかったのだ。いくら自分の息

子が可愛いからって、ありもしない幻なんかみて、馬鹿だ。

だがそこで、日吉はこんなことに気が付いた。

そうだ。彼の母親は、彼を愛していたのだ。

彼が死ぬことを、彼の母親は、どう思うだろうか。

日吉は、立ち上がって、夜の空を見た。

美が、そこにあることに、日吉は気が付いた。

視界の総てを覆いつくす、星空の美しさに、彼は気が付いた。

例えば指が六本ある化け物であっても、月や星の光は、同じように美しい姿を見せるのだということに、彼は、気が付いた。

世界は、醜い。

ただ、指の数が自分と違うというだけで、石を投げる人間がいる。

世界は、美しい。

父親を殺した人でなしの目にも、星空は、変わらぬ美しさを見せてくれる。

「生きてやる」

日吉は呟いた。

例えば、全世界が自分を忌み嫌い、憎んだとしても、俺は生きてやる。この星空が、俺の頭上にある限りは。俺を愛してくれた、母や弟たちが、この世にいる限りは。

俺は、生きてやる。

その日、貧しい農村に生まれた、日吉という名の少年は、彼の義父だった竹阿見と共に、死んだ。

戦乱の続くこの国を生き抜き、やがてはその戦乱を鎮め、この国の歴史に「秀吉」という名によって刻まれる男が、その日、生まれたのだ。